

「棟梁を育てる高校」

笠井一子著

本書は、熊本県立球磨工業高等学校「伝統建築コース」における14年間の取り組みを、女流作家 笠井一子氏の目と、関係者に対するインタビューを通して記録したドキュメンタリーである。副題は「大工になりたい人集まれ!」となっており、「徒弟制度ではなく、学校教育の中で職人を育てる初の試み」の説明文も添付してある。

これからも理解できるとおり、近年、伝統建築に携わる技能者が高齢化し、後継者のなり手が少なくなっていることから、地域の木材をも活用し、日本古来の木造軸組工法のできる人材を育てようとしたものである。その育成も従来のような徒弟制度ではなく、学校教育の中で養成するという、我が国初の野心的な取り組みを記録したものである。

本書の構成は、Ⅰ.文化財と林業の里・人吉球磨、Ⅱ.高校で大工を育てる初の試み、Ⅲ.教育の原点がここにある、Ⅳ.ものづくりは喜び・やればできる、Ⅴ.はばたけ若い大工たち、Ⅵ.「伝統建築コース」のゆくえ、の6章構成となっており、各章ともに、そこに至る苦労やそれを支えた人々の工夫が述べられている。設立に至る経緯や内容の一部を紹介すると、以下のとおりである。

球磨工業高等学校の設立は昭和38年で、「伝統建築コース」を開設するまでは、他の工業高校と変わるところはなかった。平成元年、熊本県教育委員会が出した「特色ある学校づくり」の指針を受けて、建築科を改編し、その中に「伝統建築コース」を設置した。

当時、寺社建築や数寄屋づくりなど、本格的な木造建築の良さが見直される一方で、その後継者は減少を続けていた。また、この地

方では、山林資源の活用も課題となっていた。

そこで、昔ながらの丁稚のように、親方と生活を共にしながら、その仕事振りを盗み見て覚えるような徒弟制度ではなく、学校教育制度の中で、大工をはじめ、職人を養成しようとした試みである。つまり、公教育の中で、実技学習に重点を置いた技能教育を試みたものである。

このように、本コースの特徴的なところは、職人教育を学校教育に持ち込んだ点にあり、その指導に当代一流の講師陣の招聘を行った。担当する先生方が、3か月から1年にわたり工務店などへ研修に出かけている。宮大工の棟梁の講師招聘にしても多くの苦労があり、授業を持つての現場研修となれば、さらに多くの苦労があるが、その辺にも触れられており、今後このような取り組みを考えている学校にとっては参考となる。

いくらユニークで話題性のある学校とはいえ、社会における評価がその存続の目安となる。本書は、数多くの卒業生にもインタビューを行い、その検証も行っている。卒業後挫折し、再びこの道に戻った者など、優等生だけを取り上げていない点も共感を呼ぶ。なかでも「今でも役に立つ教科書」の項や、規範術の基本である四方転びの椅子の製作の思い出は、我々に、学校教育における基礎・基本とは何か、を考えさせる記述ともなっている。

今の時代「地域との連携・協力」を掲げない学校は見当たらないと思うが、この学校の設立から深く関わり、校庭に日本建築で使用する杉、檜、栗、黒文字、こぶしなどの樹木を寄贈したりしてその発展を支えた、工務店店主の学校発展への思い入れが最後に記載されており、余生は卒業生一人ひとりを訪ねてみたいなど、心を打つ文となっている。

(草思社、222頁、1,500円) (毛利昭)